

## 人と暮らし、人と地域の再デザイン

弘本由香里（大阪ガスエネルギー・文化研究所）

### 新たな公共の担い手のために

新たな時代を切り開く主体こそ真の「生活者」ではないかと、『「生活者」とはだれか』（1996年、中公新書）の中で天野正子さんは語っています。生活者とは、「生産現場から発信する「労働者」や、消費の場から発信する「消費者」に対置され、その両方を含む全体としての生活の場から発想し、問題解決をはかろうとする人々」（天野）であり、その際のキーワードこそ、「個人・協働・オールタナティブ・地域」であると。

八尾市の第4次総合計画「やお未来・元気プラン21」が策定（2001年3月）された、2000年前後は、日本社会のパラダイムシフトを予感させる法・制度が次々と繰り出された時期でした。新たな公共の担い手の登場を後押しする、NPO法（特定非営利活動推進法）の施行や、介護保険制度の発足などはその典型です。今や生活の中に浸透してきたこれらの仕組みが、成果・問題点ともに評価される時期に来ています。その過程の中で、改めて確認できることのひとつは、社会のパラダイムシフトとは、生活やまちづくりの担い手自身の主体的な変化と成熟なしにあり得ないということではないでしょうか。

こうして振りかえってみると、既存の社会システムの限界を乗り越えて、オールタナティブな公共の枠組みを築いていくには、個の成熟を出発点とし、個の成熟を支えていくこと。そのためには、地域内・地域間の新たな個と個の関係づくりの仕組みや仕掛けが不可欠であることに気付かされるのです。

事実、この5年～10年は、オールタナティブな公共の枠組みを指向する個々の取り組みが、言説の段階から実践の段階へ。誰かがどこかでやっているという話から、自分の身近なところあるいはまさに自分自身がやっているという実生活レベルの経験へ。試行錯誤をともないながら着実に積み重ねられ広がってきた年月だったといえるのではないのでしょうか。

### 地域資源の活用とネットワーク

かくいう私も、現在複数のNPO（法人格の有無を問わず）の運営に関わっています。その一つが、大阪の都心部・上町台地界隈を舞台に活動する複数のユニークな市民活動の担い手と大学の研究者等の有志が集まり発足した（2003年5月）ネットワーク型任意団体「上町台地からまちを考える会」です。

例えば「長屋再生」を入りに、新・旧文化の融合による地域活性化に取り組む「からほり倶楽部（空堀商店街界隈長屋再生プロジェクト）」、学び・癒し・楽しみの場としての地域・社会に開かれた寺院のあり方を模索する「應典院」「應典院寺町倶楽部」、「人権」「多文化共生」をテーマにマイニリティの視点から社会のあり方を問う「コリアNGOセンター」、上町台地

をめぐる数々の魅力の発信と魅力スポットを結ぶレンタサイクル事業等を手がける「西代官山クラブ」など。地域の歴史・文化と密接に関わりながら（批判的姿勢も含めて）生まれてきた「市民の知」ともいえるべき諸資源を、上町台地という独特の場所性に立脚しながら結び合わせていくことで、より力ある知へと育てていくことができるのではないかという思いが、ネットワークの核心にあります。

上町台地界隈をフィールドに、ソーシャル・キャピタル（社会関係資本）の再構築という視点から、地域資源を積極的に捉え直し、持続的に活かしていくこと。多様な地域資源をテコに、人と暮らし、人と地域の再デザインを促していくことが、活動の大きな方向性です。とはいえ、事業はいずれもまだまだ試行の端緒の段階ですが、まちの中に学びの場をつくる「上町台地・まちの学校」や、地域資源情報の蓄積・発信と活用を促す「上町台地・地域資源データベース」、地域内外の人材とアイデアの交流の場「上町台地・100人のチカラ!」、また関連組織と協働でコミュニティ・ビジネス調査などにも取り組んでいます。将来のまちづくりの人材育成の場として、多くの大学生・大学院生が活動に主体的に参加しているのも特徴のひとつです。

### 持続可能性へ繋がるまちづくり

お気づきのとおり、ネットワークを形成する個々の活動組織・拠点地域の背景や性格はまったく異なっています。けれども、地域における文化の継承、新旧住民の融合等、新たな価値の創造に向けて、地域資源の再評価、他者との出会い、まちとのつながり、市民の力の開発に積極的な意義を見出している点に、ネットワークによる協働の可能性が見出されるのです。

これからのまちづくりに対して、こうしたネットワーク型組織が与えてくれる示唆についてふれておきたいと思います。ひとつは、異なる背景を持つもの同士による、ネットワーク型組織のありよう自体が、個々の価値観の対立をいかに乗り越えていくかという、まちづくりの究極の課題と相似を成しているものであり、他者に向き合い他者を受容する姿勢を育む基盤になり得るという点です。もうひとつは、立ち現れる諸々の課題に対して、ネットワークを構成する多様な資源を、必要に応じて柔軟に選択し組み合わせるユニットを形成し、創造的な課題解決にあたれるという点です。

さて、今年、2005年は、国連「持続可能な開発のための教育の10年」のスタート年にあたります。「持続可能性」という概念も、言説として語られていた段階から、生活の中で実感するようになってきたもののひとつでしょう。八尾市からであれ、上町台地からであれ、私たち自身が生きる場から発想して、創造的に行動するためには、私たち自身が暮らすまちの中で、見えないものに目を凝らし、聞こえない声に耳を傾けることが必要です。そのことは同時に、時を越えた過去の世代・未来の世代に思いを馳せることでもあり、さらには遠い国・遠いまちに生きる人たちに思いを馳せることにも繋がっています。まちづくりの究極の課題、個々の価値観の対立を乗り越えて公益的な価値を創造いくための、人と暮らし、人と地域の再デザインは、世界の究極の課題にも繋がっているのです。